



# 卓 話



## 『豊かなロータリーライフは 「友」とともに』

ロータリーの友事務所所長 本行 輝雄氏

### 1. ロータリーとの出会い

1995年1月17日に阪神大震災がおきました。悲惨な状況は皆様よくご存知のことと存じます。

当時私は、日本YMCA同盟で仕事をしていました。当時の責任者は宮崎幸雄さん（東京RC・米山奨学会専務理事）でした。私は宮崎さんの下で、全国にある、YMCAに対し「連絡・調整・指導・助言」をする役割を負っていました。私は、全国にあるYMCAのネットワークを使って被災した方々の救援活動をする、出来だけ早く現地に入り、救援本部を設置して他の団体などと協力して被災者支援のプロジェクトを立ち上げることを命じられたのです。現地からほぼ毎日東京にレポートを送ったのですが、最初の日（19日）のレポートに以下の文があります。



「西宮北口周辺は、神戸方面から徒歩や自転車などで避難してきた人と、神戸方面に向かう人とで大変な混雑でした。私は徒歩で約1時間かけて、西宮YMCAに到着しました。」

西宮YMCAに到着した時には、若いボランティアと職員が3名おり、崩れた箇所の片付けをしていました。被災した地域の方々がすでに建物の中で生活をしていました。若いボランティアと職員を含めた私たちは、園庭の隅で、大阪から持参したお弁当を分け合い励ましあいました。そして自転車を借りて三宮に向かったのであります。

ー以下レポートにもどります。

「西宮から三宮までの間、半壊した家屋や、ほとんど瓦礫化した住宅も数多くありました。道路も寸断され、復旧の見通しはまったく立ちません。そのような道路に車、バイク、自転車、徒歩の人があふれ、サイレンを鳴らしながら、救急車が何台も行き過ぎていきます。私は援助者としてここを通過している訳ですので、肉体的にも精神的にも一時の頑張り

で乗り切ることが出来るでしょうが、被災した方々の苦しみを思うと胸がふさがります。その人々へ向けての救援活動を考えたいと思います。東灘区役所前では救援物資が山のように積み上げられているのを目撃しました。自転車やバイクを使って、被災した人々に救援物資の配達をすることが出来ないでしょうか。自転車とバイクの寄付者を探して欲しい。」ーこの様なレポートを送ったのであります。

その時、いち早くバイクを送ってくださったのが日本全国のロータリーでした。ロータリーはすばらしい団体であると感じました。実はその時のことが、1995年9月号の「友」誌に掲載されています。オートバイに乗って3人の人が被災者を訪ねようとしている写真です。一人は先程お話ししました宮崎幸雄さんです。

また震災が起きてからすぐにRI規定審議会（Council on Legislation RIの立法機関、3年に1度開催）がベネズエラのカラカスで開催（1995年1月23日から26日）されていますが、そこで神戸地域の方々の支援する決議がされているのです。これも「友」誌3月号に掲載されています。この決議に呼応するように、世界中のロータリアンが神戸地域の被災者に大変な支援を寄せてくださいました。

それから7年後の2002年6月、私は縁あってロータリーの「友」事務所の所長として迎えられ、ロータリーの「友」誌を発刊しております。

### 2. 阪神大震災で学んだこと

災害時、救援活動に集まったボランティアは大別して三つのグループに分類されたように思います。

- ①折角ボランティアとしてここに来たのにすべき仕事がないではないか。自分はベテランであるのにここは程度が低い。この様に怒って帰ってしまう人。
- ②この様な状況の中でこんな事をしている良いのか…。自分のしていることはあまりに無力だ…。
- ③自分が出来ることを出来る範囲で頑張ろう。そこに援助の必要な人達がいる。今その人達に手を差し伸べる以外方法がないじゃないか。

結局最後までボランティア活動を続けた人は③の方々でした。私達はこのボランティア活動を通じて、現実を直視しながら想像力と創造力をもって明

日に希望を持ちつつ一步一步着実に前進し、評価し合うことの大切さを学んだように思います。

### 3. ロータリーでの体験

私がYMCAを退職してロータリーの「友」事務所の所長になった時、多くの方から『「友」誌は読まれないベストセラーだからね』と言われました。「友」は読まれないと、どこを指しておっしゃっているのでしょうか。皮肉に「友」は読まれざるベストセラーと言って横を向いてしまう事は、ロータリアンとしての誇りを自ら放棄してしまう事ではないでしょうか。少なくとも私達は『「友」誌は読まれないベストセラーだとは言わないでおこう』と考えました。

最近ロータリーの中で、「ロータリーはだめになった！！」「昔はこんなではなかった」という人が多くいます。しかしそこからは何も生まれえないと思うのです。「たまねぎの皮をむくような」作業をしている気がします。今こそ、雪だるま作りに学ぶ思考に転換しなければならないと思います。

中山義之ロータリーの友特別顧問は、「私達（ロータリー）の願いは、全ての人が善なる想いをもち、必要とする相手に対して思いやる心が満ち溢れた社会の建設です。」とおっしゃいました。そして『友委員会の委員長として、このような社会が一日も早く来ることを願って「友」を創り続けたい』とおっしゃいました。私はこの発言に強く励まされました。この発言の中に、ロータリーの真髓があると思いました。それは「ロータリーとは明日を信ずる人達の集まりである」ということです。勿論おめでたい楽観論ではなく、現実の厳しさを直視しながら、尚希望を失わない粘り強さを持つ人達の集まる所という意味です。「友」誌はこの事を日本のロータリアンにお伝えする使命があると思います。

今後も『豊かなロータリーライフは「友」とともに』をモットーに、友誌を作っていきたいと思いません。変わらぬご支援をお願いします。